

Title	「今、何故『歯と健康』か」
Author(s)	関, 淳一
Citation	目で見るとWHO. 2012, 49, p. 10-10
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/86751">https://doi.org/10.18910/86751</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## ●日本WHO協会フォーラム「歯と健康」

日本WHO協会は講師に滋賀医科大学教授の柏木厚典氏と大阪府歯科医師会常務理事の深田拓司氏を講師に迎え 2012年3月8日に大阪歴史博物館の講堂で日本WHO協会フォーラム「歯と健康」を開催致しました。その内容をまとめましたのでご報告いたします。

# 「今、何故『歯と健康』か」

日本WHO協会 理事長 関 淳 一

奇しくも 18 年前の 1994 年の世界保健デーのテーマ（注 1）は、“Oral health for a healthy Life”「健やかな生活は口腔保健から」でした。ただ、当時は虫歯の治療が大きな課題でしたが、今回のフォーラムでは歯周病に焦点が当てられている点で大きな違いがあります。

## ～健康日本21(第2次)～(素案)

特に、この十数年、歯周病と、糖尿病、虚血性心疾患、脳卒中等の NCDs（非感染性疾患）とよばれる全身性の疾患との関係について多くの知見が発表されております。また、NCDs は現在世界中で患者数が急増し、世界全体の死亡原因の 6 割以上を占める迄に至っております。厚生労働省も今回平成 25 年度からの「健康日本 21（第 2 次）」（素案）で、特に「NCDs の予防」と共に「歯・口腔の健康」を取り上げています。歯周病については、前述の疾患以外にも骨粗鬆症、早産・低体重児等の妊娠異常、メタボリックシンドローム等との関連についても多数の報告がなされています。

今回、このフォーラムの為に、いくつかの論文に目を通している中で、歯周医学ともいわれる、この分野の研究の流れには、1996 年にアメリカのバージニア州で開催された「世界歯周病学」ワークショップが画期的な役割を果た

したのではないかと強く感じました。また最近では、高齢者残歯数と認知症、寿命との相関などについての研究結果も報告されています。言う迄もなく、口腔は人間の身体の一器官として、呼吸、咀嚼、発声など生理的に重要な役割を荷っておりますが、それ以外に食事、会話を楽しむ、歌、楽器演奏などいわゆる生活の質とも密接な関係があります。世界的に高齢化が進行している現在、冒頭に申しました、「健やかな生活は口腔保健から」というテーマは、改めて、重要な意味を持つと言えると思います。このようなことを総合して、WHO の歯科部長バームスは今世紀の初めに「21 世紀の歯科医はデンティスト（単なる歯科医師）からオーラル・フィジシャン（口腔内科医）へと役目が変わる」と指摘しています。

このような現状を考える時、我々は、歯が痛くなって初めて歯科医に行くのではなく、普段から受診することが全身の病気の予防につながりますし、医療費削減にもつながってくると思います。今回のフォーラムが、口という大切な臓器について皆様と共に改めて考える機会となればと思っております。

（注 1）世界保健デーのテーマ

国連の加盟国の批准を得て、WHO は 1948 年 4 月 7 日に設立されました。このことを記念し、1950 年から、4 月 7 日を世界保健デーとして定め、その年の健康に関し重要で話題性のあることに焦点を当てて世界中の人が考えなければならないことを、世界保健デーのテーマとして発表し、各国に保健衛生活動の促進を呼びかけています。

私どものフォーラムの後、5月にアメリカ心臓協会(AHA)から、「歯周病と動脈硬化性疾患」について学術声明が出されました。今後、更に多くの議論が予想されます。